

## 文末の「ノニ」に関する考察

家田 章子

### 1. はじめに

「ノニ」はいわゆる接続助詞であり、「AノニB。」という複文全体で逆接表現として多くの分析がされてきた。また「Aノニ。」という言語形式<sup>1</sup>については、あくまでも「AノニB。」の複文からBの要素が省略されたものとして分析されており、その意味や機能については、不服や不満、驚きや意外感を表す表現であると分析されてきた。しかし、(1)や(2)の文はこの表現のみで完結しており、言語化されるべきBが省略されているとは考えにくい。発話意図に関しても驚きや不満を表すというよりは、感謝や落胆の気持ちを表していると解釈される。このような場合にも「Aノニ。」という言語形式が用いられている。

- (1) 先にお帰りになって良かったのに。 (失踪)  
(2) 私、日本人信じてたのに。 (麻婆豆腐)

また、「～バ／ナラ ノニ。」の言語形式は反事実的な条件文として解釈されてきた。しかし(3)を見てみると、Bが今週末に万博に行くかどうかは、中立的な状態で未定であり、「～バ／ナラ ノニ。」という言語形式が常に反事実的条件文となるとは言えないことを示している。

- (3) A: 万博、いつ行こうかなあ。  
B: 今週末にでも行けばいいのに。

本稿では、これまで分析の対象とされてこなかったこれらの文を分析するとともに、文末の「ノニ」の意味・機能を再考し、統括的に記述することを試みる。

---

<sup>1</sup> 本稿では「あんな難しい議論なんて、いらぬのにね。」(ドラマ「白い巨塔」2004.03.04)や、「あのパイプは使えるのになあ」と周辺にもらしていた。」(毎日新聞 1991年)といった、「ノニ」の後に終助詞や間投助詞が後続しているものも分析対象とするが、煩雑さを避けるため、「Aノニ。」という表現形式に代表させて論じる。

## 2. 先行研究

「Aノニ。」に関する先行研究の記述を概観する。先行研究の記述は、①後件の省略、<sup>2</sup> ②発話意図、③事実的か否か、の大きく3つの観点に分けられるので、各観点で先行研究の記述を概観し、再考を要すると思われる点を挙げる。

### 2.1. 後件の省略

先行研究の多くは、「Aノニ。」が「AノニB。」のBという後件が省略されたり、落ちたりしたものであるという立場に立っている(森田(1980:909)、Makino and Tsutsui (1986:333)、<sup>3</sup> 松村(1988:661)、Alfonso(1989:530)、<sup>4</sup> 前田(1995:501))。

白川(2002)では「言いさし(p.433-434)」として紹介され、その参照先として示されている松岡(2000)では、「終助詞的用法と呼ばれるもの」(p.233-234)があることが記述されているが、後件が省略されたものと判断するのか、そもそも後件は存在しないものとして判断するのかについては、明示されていない。

また、後件が省略される環境については、後件が「予測可能」<sup>5</sup> (Makino and Tsutsui, 1986:333)であったり、「文脈から自明」<sup>6</sup> 松村(1988:661)であったりする場合であると記述がされている。<sup>7</sup>

まず、「Aノニ。」は「AノニB。」のBという後件が省略されたものであるかについて考察したい。「省略」と言うからには、「もともと何かが存在した」ことが前提になっており、省略された「何か」を復元することが可能でなければならない。実際に復元を試みると以下の

---

<sup>2</sup> 本稿では「Aノニ」という言語形式を「AノニB」のBが省略されたものであるという立場をとらないが、先行研究概観の便宜上、ここでは「省略」という言葉を使用する。

<sup>3</sup> 原文は “In colloquial speech, if the content of the main clause is predictable, the clause often drops”. である。dropという語が用いられているが、「本来そこにあったものがなくなる」という観点においては、省略と同じであると考えた。

<sup>4</sup> 原文では、“elliptical sentences”である。

<sup>5</sup> 原文では、“if the content of the main clause is predictable”である。

<sup>6</sup> 松村(1988)で挙げられている例は、「結構いい成績でしたよ。あまり勉強しませんでしたのに」のようなものであり、これらはいわゆる倒置の一種であると考えられる。しかし、例えば、子供が有名大学に合格したことが近所で話題に上っているという状況で、「あまり勉強しませんでしたのに」と言えば、「有名大学に合格した」ことは話し手にも聞き手にも「自明」である。

<sup>7</sup> 他にも、Alfonso(1989) などがある。“The elliptical sentences shown in the last section of the Frame are used when the conclusion is quite obvious, or at least can easily be surmised. This pattern occurs often” .(p.530)

ようになる。

- (4) せっかくきれいにできたのに。 (Alfonso 1989:529 原文ローマ字)  
 <復元される後件:汚くなった/壊れた/誰も見てくれない/……>
- (5) ファッションでやれるほど甘いもんじゃねえじゃねえか。それはさ、俺たち自身が一番分かっているはずなのに。 (プライド)  
 <復元される後件:俺たち自身が分かっていた>
- (6) 「プラスチックや布が少なければ作業はずっと簡単になるのに」とのボヤキが出る。 (『毎日新聞』1992年)  
 <復元される後件:プラスチックや布が多いから作業が簡単にならない>
- (7) そんな時間あるんだったら春菜ちゃんと旅行にでも行けばいいのに。  
 <復元される後件: ? > (恋ノチカラ)

(4) (5) (6) は言語化されていない「ノニ」の後件を復元することは可能だが、(7) のように何か省略されているとは考えにくく、その復元が困難な使用例もある。これは、「Aノニ。」の言語形式が常に「AノニB。」の後件を省略したものとは言えないことを示している。また、後件が論理的に復元可能である場合は、その後件を導く根拠は何か、「予測可能」や「文脈から自明」とはどういうことなのかを明示的に説明しなければならない。

さらに、後件の復元が可能な文でも、(5) (6) のように言語化された部分からは一義的に復元が可能なものもあれば、(4) のように言語化された部分からは一義的に復元するのが困難なものもある。また、聞き手が復元したものは、(4) のように前件から推論したことに反する結果の場合もあれば、(5) (6) のように前件そのものの否定となる場合もある。このことは単に「前件」から推論したことに反することが「後件」に現れるという枠組み自体に問題があることを示唆しており、枠組みを見直す必要性もある。

## 2.2. 発話意図

先行研究で述べられてきた「Aノニ。」の発話意図については、概ね以下の3つに分けられる。

- ① 不満、不平、恨み等の感情を表す (森田 1980, Makino and Tsutsui 1986 他)
- ② 驚き、意外、疑い等の感情を表す<sup>8</sup> (松村 1988, 松岡 2000 他)

<sup>8</sup> 疑いの気持ちは、マイナスの感情を表すことの方が多いと思われるが、厳密に言うと常にマイナスの感情のみを表すとは言えないので、中立として扱う。

③相手を詰問し批判したりする気持ち (松村 1988, 前田 1995)

最も多い記述は、森田(1980)の記述「「のに」が“前件がそのような事実であるにもかかわらず、あえて後件の事実である”という逆接ゆえ、後件を省略することによって、“前件の事実から予想し期待していたにもかかわらず”という期待はずれの事実に対する不満の気持ちを含めた言い方となる。なぜだろうという疑いの気持ちを伴う。」(p.909)に代表されるようなもので、「AノニB。」が「AならばBでない。しかし予想・期待に反してB」という、いわゆる逆接を表しているために、「Aノニ。」には不満や不平といったマイナスの感情を表す意味があるとするものである。また、②のように中立的な感情を表すという記述も少なくない。これらはいずれも「AノニB。」と共通する発話意図として挙げられている。

①と②が話し手の感情を表すのに対し、③は聞き手への働きかけを意図するという点で性格を異にすると言える。このことに言及しているのは、松村(1988)と前田(1995)である。松村(1988:661-662)は、(8)(9)の例を挙げて、「相手に詰問する気持ちのこめられることもある」と述べている。しかし、例文を見ると相手を詰問する発話意図を担っているのは、「ノニ」ではなく下線部分であると考えてるのが妥当である。

(8) 何遍同じことを言ったら分かるんだ。この前あれほど注意したのに。

(9) どうして、ぼくのいうことをわかってくれないんだ。もう十年もつきあっているというのに。  
(松村 1988:662、下線引用者)

例えば、この下線部を除いた(10)や(11)は聞き手に「詰問」という意図が必ずあると言い切ることはできず、単に話し手の感情を表していると解釈するのが自然である。このことは、「ノニ」自身が相手を詰問する意味を担っているとは言えないことを示している。

(10) この前あれほど注意したのに。

(11) もう十年もつきあっているというのに。

前田(1995:500-501)は、ノニとケレドモの終助詞的な用法における意味の違いという観点から、以下のような例を挙げて分析している。

(12) a. 気に入らない相手なら断ってもいいけど。

b. 気に入らない相手なら断ってもいいのに。  
(前田 1995:500)

(12)bに「どうして断らないの。」という相手を非難するような表現を付け加えてみると、確かに「Aノニ。」の形式の方は、批判を表しているように解釈される。しかし、「無理しないでね。」という相手を思いやるような表現を付け加えてみても、文としての認定度も低くならず、必ずしも相手を批判する発話意図があるとは言い切れない。

(13) 気に入らない相手なら断ってもいいのに。どうして断らないの。

(14) 気に入らない相手なら断ってもいいのに。無理しないでね。

また、これと逆に①や②に分類されるものであっても、相手に働き掛けることができる場合がある。例えば、先行研究では(15)のような文が挙げられており、いずれも、単に話し手の感情を表していると解釈されているが、(16)のように、相手に働き掛けることもできる。

(15) おかしいな。もう時間はとうに過ぎてるというのに。 (森田 1980:909)

(16) A: おかしいな。もう時間はとうに過ぎてるというのに。

B: ちょっと様子を見てきます。

これに加えて、実際の発話<sup>9</sup>では、発話意図に関しても(1)や(2)のような驚きや意外を表すとは考えられないようなものもあり、「Aノニ。」の意味をその発話意図から一義的に定義することは困難である。以上のことから言えるのは、「Aノニ。」における発話意図というものは、聞き手に対する働きかけがあるか否も含めて、聞き手がその発話時の状況からどう判断したかということに委ねられるということである。

しかし、それでは「ノニ」自体に意味や機能は無いのか、という疑問が湧く。文末に「ノニ」を用いることを話し手が選択し、聞き手がその「ノニ」を手がかりとして発話意図を解釈し、「ノニ」が使われていない場合と、何らかの差異を感じる以上、「ノニ」には何らかの意味なり機能なりがあるはずである。本稿では文末の「ノニ」の意味・機能を再考し、発話意図の解釈過程の記述を試みる。

---

<sup>9</sup> 実際の言語使用では、音声だけでなく文字で表されることもある。本稿中では煩雑さを避けるため、以下「発話」で代表させるが、本稿の分析は、音声だけでなく、文字による表現にも当てはまるものである。

### 2.3. 事実的か否か

「Aノニ。」が反事実的条件文であるかどうかという観点で記述している先行研究は、前田(1995)と白川(2002)である。前田(1995)は、「ノニ」と「ケレドモ」を比較することで、「Aノニ。」が反事実的条件文であることを論じている。

- (17) a. 気に入らない相手なら断ってもいいけど。  
b. 気に入らない相手なら断ってもいいのに。 ((12)再掲)
- (18) 「明日のパーティーいらっしやいませんか」  
a. 「うーん、会議がなければ行けるけど」  
b. 「うーん、会議がなければ行けるのに」 (前田 1995:500)

これらの文が事実的でないという解釈については、次のように述べられている。「両例に共通するのは、bの条件文が、反事実的条件文であるのに対し、aの条件文は仮定的である可能性もある点である。「AのにB」には、ある予想「AならばB」が外れたことが含まれており、そのため「Aのに。」とAから予測される帰結Bが省略されていても、Bが生起しなかったことはわかる。だからAは反事実的だという解釈がなされるのである。」(pp.500-501)

ここでいう「反事実的」とは、「実現されなかった、あるいは実現されないことが確実であること」と「事実でないと確認されたこと」を指すと思われる。<sup>10</sup> そうすると、(17)では、「断らなかった」場合、あるいは「断らない」と表明していない場合に用いられる」(p.500)ことや、「断らない」ことに対する批判が表されている」(p.500)ことから、「気に入らない相手だ」ということは少なくとも話し手にとっては事実的だと認識されているはずである。そうすると、「反事実的」が指すのは「断る」であり、(18)においては、「会議がない」あるいは「行ける」もしくはその両方であると考えられる。しかし、次のような場合はどうだろうか。

- (19a) A: 今晚いっしょに映画行ける？  
B: 仕事が終われば大丈夫なのに。  
A: じゃあ、手伝うよ。

<sup>10</sup> 「事実的」とは、「言語によって表された事態と、現実との事実関係」(前田 1996:11)から判断して、「実現された、あるいは、実現されることが確実であること」と「事実であると確認されたこと」を指すと考えられる。

(19b) A: 今晚いっしょに映画行ける？

B: 仕事が終われば大丈夫だったのに。

A: ?じゃあ、手伝うよ。

(19a)「大丈夫なのに」の方は、「反事実的」のはずの「仕事が終わる」あるいは「大丈夫」が、「事実的」に変わる可能性を感じさせる。一方、(19b)の「大丈夫だったのに」では、「仕事が終わる」や「大丈夫」は「反事実的」なままであり、「事実的」に変えられる可能性は全く感じられない。したがって、「Aノニ。」の言語形式が事実的か否かを担っているのではなく、その他の部分（「大丈夫だった」）が担っていると考えた方が妥当なのではないか。<sup>11</sup> また、前出の(3)のような文では、Bが万博にいつ行くかは未定であり、今週末である可能性も十分に考えられる。つまり、今週末に万博へ行かない、あるいは行かないつもりであるという「反事実」を認めることはできない。

ただ、リアリティーという概念そのものは「仮定」「確定・既定」といったものに対応する（前田 1996:11）ものであり、<sup>12</sup> 特に「既定」という概念は従来から「ノニ」を特徴づける使用制約として述べられてきた概念である。「AノニB。」という言語形式において「既定」的な内容であることは、「ノニ」の後件だけでなく、前件に対する制約にもなると言われてきた（戸村 1988、渡部 1995）。「ノニ」文に何らかの既定性があることは確かであるので、「Aノニ。」における既定性の制約についても再考する。

### 3. 文末の「ノニ」再考

本節では、2節で指摘した点に基づき、文末の「ノニ」について再考する。まず、議論の枠組みとして「前件」「後件」といった語の定義づけをした上で、「Aノニ。」における文の論理構造を示す。そして、文末のノニの本質的な意味・機能を再考し、仮説を立て、その仮説の妥当性を検証する。

<sup>11</sup> 白川(2001)にも、「〜けど」と「のに」類の比較により、反事実的条件としてしか解釈できないという考え方が記述されているが、主張されている点は前田(1995)と同じであるので、ここでは特に紹介しない。

<sup>12</sup> 前田(1996)によると、「リアリティー」という言葉そのものは、言語学研究会による一連の「つきそいあわせ文」の研究において用いられたもの(p.11)である。

### 3.1. 文末の「ノニ」の論理構造

#### 3.1.1. 語の定義づけ

「ノニ」文におけるいわゆる逆接の用法を分析するために、先行研究の多くでは「前件」「後件」という語を用いている。「ノニ」の前に現れる節を「前件」、「ノニ」の後に現れる節を「後件」と呼び、「前件」と「後件」の関係を逆接であると述べているが、厳密に「ノニ」文を分析するには、「前件」と「後件」という2つの枠組みでは不十分である。<sup>13</sup> 本稿では「推論の根拠」、「推論の結果」、「認識されている事態」、<sup>14</sup> という3つの要素から考えていくこととする。

また、「前件」「後件」という語を用いると、「前件」には「推論の根拠」しか含まれないような印象を与えるが、実際には「推論の根拠」だけでなく「推論の結果」も「前件」に含まれると考えたほうが妥当である(渡部 1995、家田 1997 他)。これまでの先行研究での記述との混乱を避けるために、本稿では、「AノニB」の「A」を「ノニ節」、Bを「主節」と呼んで分析をすすめる。

#### 3.1.2. 論理構造による記述

「ノニ」文の論理構造については、基本的に渡部(1995)の立場「PからQが予想／期待されるケド、実際にはRである(p.560)」を踏襲する。本稿では、p(推論の根拠)、q(推論の結果)、r(認識されている事態)を用いて、「pならばqノニr」を「ノニ」の論理構造と設定する。これに従うと、「AノニB。」は、「p→q ノニ r。」で表すことができる。「p→q」と「r」の関係は、「p→q」という予想に反して事実は「r」である、という予想の結果と事実との乖離を表す場合や、「p→q」を根拠に、「r」が確信を持って判断する場合などがある。<sup>15</sup>

実際の言語使用では、ノニ節にも主節にも、モダリティが現れることがある。また、pqrの全てが言語化されるわけではない。この2つの点を考慮してさらに精密に記

<sup>13</sup> 「前件／後件」という設定に対する問題点は、家田(1997:6-7)参照

<sup>14</sup> 家田(1997)では、「推論に反する結果」、同(2005)では、「実際の結果」という用語が用いられているが、これらの用語が指す概念を包括する概念「認識されている事態」を採用する。

<sup>15</sup> 「逆接の「ノニ」文では、pがqの十分条件として機能しないという論理構造であるが、必然的な「ノニ」文においては、pはqの十分条件として機能しているのに加え、rの十分条件としても機能している。結果的に、「ノニ」の前節の根拠を後節の根拠として推論するような論理構造を持つ」家田(2005)



述すると、「AノニB。」および「Aノニ。」は、それぞれ、(20) (21)のように記述することができる。

(20) 「(p) (モダリティ)→(q) (モダリティ) ノニ r(モダリティ)。」

(21) 「(p) (モダリティ)→(q) (モダリティ) ノニ r(モダリティ)。」

※( ) は、言語化されない可能性があることを表す

※..... は、実際に言語化されないことを表す

(21)で示したように、「Aノニ。」は、「(p) (モダリティ)→(q) (モダリティ) ノニ r(モダリティ)。」という構造を持つが、実際に言語化されるのは、次の8パターンである。

(22) I ① 『pノニ。』 ② 『p MOD ノニ。』

II ③ 『qノニ。』 ④ 『q MOD ノニ。』

III ⑤ 『p→qノニ。』 ⑥ 『p MOD→q MOD ノニ。』

⑦ 『p MOD→qノニ。』 ⑧ 『p→q MOD ノニ。』

※『 』は実際の言語表現を、MOD はモダリティを表す

pqrの要素うち、I はpのみが言語化、II はqのみが言語化、そしてIIIはpqの両方が言語化された場合の構造である。

### 3.2. 仮説の提示

家田(2005)で指摘したように、「ノニ」の機能は推論を用いた論理的結びつきを示すことであり、「ノニ」文の発話意図は、「ノニ」によって決められるのではなく、AとBとの関係によって決まると考えられる。文末の「ノニ」に関しても、発話意図は「ノニ」そのものが担っているとは考えにくい。Blakemore(1988 他)によって指摘されている「手続き的な意味(procedural meaning)」という概念を用いると、「Aノニ。」の意味・機能については次のような仮説が立てられる。

(23) 文末の「ノニ」の本質的な機能は、話し手によってその妥当性を主張された推論(p→q)と、何らかの論理的关系を持つ聞き手によって判断された事態(r)との関係から発話意図の解釈を促すことである。

「手続き的な意味(procedural meaning)」とは、「表出命題をある特定の種類の文脈内で

家田章子

処理するように指示することができる (Blakemore 1988:149) (日本語翻訳版 1994:207)』もので、「ノニ」も「解釈手続きへの指針(今井 2001:37)」を示す意味を担うと考えることができるからである。次節では、この仮説の検証をする。

### 3.3. 仮説の検証

前節で立てた仮説について、まず、主節の言語化が可能である場合は、その主節を導く根拠は何か、「予測可能」や「文脈から自明」とはどういうことなのかという視点から検証する。また、「Aノニ。」という言語形式における発話意図解釈の過程を明らかにする。

#### 3.3.1. 主節の言語化

聞き手が文末の「ノニ」の文を解釈するということは、主節の言語化を試みるということである。まず、実際に言語化されているのが、推論の根拠(p)だけの文を分析する。

(24) せっかくきれいにできたのに。 (4)再掲)

ノニ節:p(きれいにできた)→ q

主節:r(汚くなった／壊れた／誰も見てくれない／……)

※……は、実際に言語化されないことを表す

主節を言語化しようとする、実際の発話状況によって様々な可能性が出てきて、(24)の文そのものから、主節を一義的に決定することはできない。しかし、p(推論の根拠)を示されただけで、聞き手はある程度の予測が可能なることも事実である。つまり、仮説(23)のように、語用論的な解釈が必要となる。この場合、主節として言語化されているのは、目の前で起きている事態や、話し手が持っている情報などの中で、言語化された推論の根拠と何らかの論理的結びつきがあると判断された事態である。聞き手が様々な事態や情報のうちどの事態を論理的結びつきがあると判断するかは、個人差もある。それゆえ、たとえ話し手が主節を一義的に意図して発話しても、同じ状況で複数の聞き手がいる場合は、言語化される主節も異なってくることの説明も可能である。

次に、推論の結果(q)のみが現れている文についても検証する。<sup>16</sup>

<sup>16</sup> 「俺たち自身が一番分かっているはずだ」を推論の根拠(p)と解釈する可能性もある。その場合は、(25)のように、pのみが言語化された場合の解釈になる。

- (25) ファッションでやれるほど甘いもんじゃねえじゃねえか。  
 それはさ、俺たち自身が一番分かってるはずなのに。 ((5)再掲)  
 ノニ節:p → q(俺たち自身が一番分かっているはずだ)  
 主節:r(俺たち自身が分かっていた)

p(推論の根拠)、もしくは q(推論の結果)が示されただけで、主節を導くことができるのは、「ノニ」文においては p(推論の根拠)にはq(推論の結果)を引き起こしやすい条件が選択されているからである。<sup>17</sup>「ノニ」が推論を用いた論理的結びつきを示すことであるからである。3.1.2 でも述べたように、「p→q」と「r」の関係は、「p→q」という予想に反して事実「r」である、という予想の結果と事実との乖離を表す場合や、「p→q」を根拠に、「r」が確信を持って判断される場合などがある。(24)(25)はそれぞれ以下のような論理構造になり、(25')のように q が言語化されている場合は、推論の結果そのものが妥当か否かに焦点が絞られやすくなることも説明できる。

- (24') p(きれいにできた) → q ノニ  
 r(= -q(汚くなった/擦れた/誰も見てくれない/……))  
 (25') p → q(俺たち自身が一番分かっているはずだ) ノニ  
 r(= -q(俺たち自身が分かっていた))

次に、推論全体(p→q)が言語化されている場合についても考えたい。この場合も、推論(p→q)と何らかの論理的結びつきがあると判断した事態(r)が認識された場合のみ、一義的に主節を言語化した解釈が可能である。

- (26) 「プラスチックや布が少なければ作業はずっと簡単になるのに」とのボヤキが出る。 ((6)再掲)  
 ノニ節:p(プラスチックや布が少ない) → q(作業が簡単になる)  
 主節:r(プラスチックや布が多いから作業が簡単にならない)

<sup>17</sup> 「ノニ」文の推論の根拠は、どのような要素でも良いわけではなく、ある事態を引き起こすための十分条件である必要がある。一般的に、この十分条件は複数あると考えられるが、「ノニ」文では、これらの複数の十分条件のうち「せっかく」「こんなに」「あんなに」のようにより強い条件であると話し手によって判断されたもの、または客観的な事実に拠る「本当は」といった表現を用いたものが多い。(家田 2005)

家田章子

(26')  $p$ (プラスチックや布が少ない) $\rightarrow q$ (作業が簡単になる) ノニ  
 $r$ ( $\equiv \neg p$ (プラスチックや布が多い) $\rightarrow \neg q$ (作業が簡単にならない))

しかし、同じように推論全体が言語化されていても、主節を言語化することが困難な場合がある。それが、(27)である。この論理構造を(26')に倣って記述すると(27')のようになるが、この解釈にはその妥当性に疑問が生じる。

(27) そんな時間あるんだったら春菜ちゃんと旅行にでも行けばいいのに。  
(7)再掲

ノニ節: $p$ (時間がある) $\rightarrow q$ (春菜ちゃんと旅行にいけばいい)  
主節: $r$

(27')?  $p$ (時間がある) $\rightarrow q$ (春菜ちゃんと旅行にいけばいい) ノニ  
 $r$ ( $\equiv \neg p$ (時間がない) $\rightarrow \neg q$ (春菜ちゃんと旅行に行かない))

もし、(27)でアドバイスを受けている人物が、「時間があるけど、何をしようかなあ…」と思っている程度の状況であるならば、主節の言語化は困難になる。<sup>18</sup> そうすると、聞き手が発話意図を解釈する手がかりの事態( $r$ )が無いことになってしまう。このような場合も網羅的に説明するためには、仮説に以下の内容を補足する必要がある。

(28) 推論( $p\rightarrow q$ )と論理的関係を見いだせるような事態( $r$ )が聞き手によって認められない場合は、推論の妥当性のみを主張する意図として解釈を促す。

つまり、たとえ話し手にとって論理的結びつきがあると判断した事態( $r$ )があっても、聞き手にとってそれが認識されない場合は、その発話意図は事態( $r$ )との関係から導き出すのではなく、推論( $p\rightarrow q$ )そのものが発話意図となる。

### 3.3.2. 発話意図の解釈過程

文末の「ノニ」の発話意図を解釈するためには、推論の根拠( $p$ )、推論の結果( $q$ )、認識されている事態( $r$ )の3つの要素が必要であるが、3.1.2.で述べたように、その全てが言語化されるわけではない。「Aノニ。」のように( $r$ )が言語化されない表現形式があるというだけでなく、「AノニB。」という表現形式においても、 $p$ か $q$ のどちらか一方のみが言

<sup>18</sup> もし、アドバイスを受け手が「何もしないでずっと家にいるつもりだ」と表明していたり、「春菜ちゃんと旅行に行く気はない」と主張しているような場合は、主節は一義的に決められる。

語化されることの方が多いという事実がある。また、たとえ、pqrの全てが言語化されていたとしても、それがそのまま発話意図になるとは限らない。いわゆる文字通りの意味と発話意図は異なるレベルで考えられるべきである。仮説(23)と補足(28)より、発話意図の解釈過程を示すと次のようになる。

(29) <解釈の過程>

- ① 話し手によって言語化された推論の要素(pq)を認識する。
- ② 言語化された推論の要素(pq)と論理的関係をもつ事態(r)が認識できるかどうかを判断する。
- ③-1 認識できる場合:推論(p→q)と論理的関係をもつ事態(r)との関係から発話意図の解釈を行う。
- ③-2 認識できない場合:推論の妥当性のみを主張している、と解釈する。

具体的には以下のように発話意図の解釈がされる。

(30) 先にお帰りになって良かったのに。 (1)再掲

- ① q(先にお帰りになって良かった)を認識
- ② 論理的関係を持つr(この言葉をかけられた人物が待っていた)を認識
- ③ 「ありがたい」という発話意図に解釈

事態(r)が聞き手に認識されている場合も、r(待っていた)そのものが発話意図になるのではなく、あくまでも、推論(p→q)と認識された事態事態(r)との関係から、発話意図「ありがたい」を導き出すものである。<sup>19</sup>

(31) 私、日本人信じてたのに。 (2)再掲

- ① q(私は日本人信じていた)を認識
- ② 論理的関係を持つr(日本人に裏切られた)を認識
- ③ 「落胆」という発話意図に解釈

(31)を、もし「私、日本人信じてた」と言うだけだと、単なる事実としての述べ立てになるが、「ノニ」を用いることで推論の結果との乖離を表した落胆を表わすことが可能になる。

<sup>19</sup> 発話意図の解釈は、聞き手によって異なる。例えば、(30)の発話意図が「迷惑」と解釈されることもある。

家田章子

- (32) A: 万博、いつ行こうかなあ。  
B: 今週末にでも行けばいいのに。 ( (3)再掲)
- ①q(今週末にでも行けばいい)を認識  
②論理的関係を持つrを認識できなかった  
③「ある根拠(理由)があつて、今週末に万博に行くことを勧める」という  
話者の推論の妥当性の主張を発話意図として解釈

論理的関係を持つ事態(r)が聞き手に認識されない場合は、「今週末に行くべきである」  
ことの妥当性を主張していると解釈される。

#### 4. 文末の「ノニ」文における既定性

前田(1995)などで指摘された「反事実性」は、「ノニ」文について、ノニ節にも既定的  
な主節にも、「既定的」な内容しか現れないという従来の分析と大きく関係する。「反事  
実性」とは、「事実ではない」ということが「既定的」であること同義だと解釈される。蓋然  
性を表すモダリティは、「既定的」であるかどうかを判断する上で関係の深い要素である。  
確かに、「一はずなのに」という蓋然性の高いモダリティは「ノニ」と頻繁に共起する。しか  
し、「一かもしれないのに」という蓋然性の低いモダリティとも共起することがある。

- (33) (海で泳いでいる人がいるのを見て)雷が落ちるかもしれないのに。

これは、例えば「p(雷が落ちるかもしれない)→q(海から上がった方がいい)ノニr(海で  
泳いでいる人がいる)」という解釈が可能である。話し手が発話可能かどうかという観点  
で考えれば、推論の根拠(p)が既定的でなくても発話できるが、認識されている事態  
(r)が既定的でなければこの発話がされることは無い。少なくとも話し手にとっては、rが  
「既定的」である必要がある。しかし、(34)は文の容認度が極端に低いと思われる。(33)  
(34)も、「かもしれない」が作用しているのは、推論の根拠(p)であるように思えるが、文  
の容認度には差がある。

- (34) ? (全然汗をかいていない人を見て)今日は暑いかもしれないのに。

では(33)と(34)の違いは何か。執筆者は、推論の根拠としての(p)のレベルの違いで  
はないか、と考える。(33)の推論の根拠(p)は「黒い雲が近づいてきた」といった根拠に

基づいた推論の結果(雷が落ちるかもしれない)であるが、その推論の結果をさらに別の推論の根拠としても用いたものである。

推論の起点(p1: 黒い雲が近づいてきた → q1: 雷が落ちるかもしれない)  
 新たな推論(p2: 雷が落ちるかもしれない → q2: 海から上がった方がいい)

一方、(34)の推論の根拠は、何かから推論した結果とは考えにくく、「今日は暑い」というのはいわば推論の起点にあたると思われる。推論の根拠が推論の起点となる根拠(以下、「起点根拠」)の場合は、既定的でなければならないという制約があるが、推論によって導かれた根拠(以下「推論根拠」)はこの限りではない。実際に推論根拠と「かもしれない」という蓋然性の低いモダリティを共起させると、文の容認度は低くなる。

(35) ? 黒い雲が近づいてきたかもしれないのに、雷が落ちるかもしれない。

また、話し手と聞き手の両方から考えると、話し手にとってはrと起点根拠p、が既定的でないと発話は不可能であるが、聞き手にとっては解釈するために「既定的でなければならない」ものは無いと考えられる。

(36) 雷が落ちるかもしれないのに。 ((33)再掲)

例えば、(36)は、話し手が「海で泳いでいる人がいる」という事態を既定的なものとして認識して初めて発話が可能になるが、聞き手がその事態を認識できるかどうかは分からない。以上の考察から、「Aノニ。」における発話、解釈の過程と事実性(既定的か否か)は以下のようにまとめられる。

話し手:r(話し手にとって既定的)を認識  
 →「Aノニ。」(pは起点根拠の場合に限り話し手にとって既定的)を発話  
 聞き手:「Aノニ。」の発話を認識  
 →rを認識(認識できる場合は、聞き手にとって既定的)

以上、「Aノニ。」と事実性の制約について考察を行った。

## 5. まとめ

文末の「ノニ」の本質的な意味・機能は、「話し手によってその妥当性を主張された推

家田章子

論 ( $p \rightarrow q$ ) と、論理的関係をもつ聞き手によって判断された事態 ( $r$ ) との関係から発話意図の解釈を促す」ことであることを述べた。そして、「Aノニ。」の表現意図の解釈過程についても、語用論的な観点から明示した。また、「反事実的」という観点に関しては、「既定的でなければならない」という制約と関連させて、話し手と聞き手の両方から考察を行った。「既定的であるべき」という制約は、話し手のみに課せられる制約であり、「 $p \rightarrow q$  ノニ。 ( $r$ )」という論理構造のうち、 $r$  という事態、および起点根拠となる場合の  $p$  の二要素については、その既定性が要求されることを指摘した。ノニ文における既定性の制約に関しては、今後、文末の「ノニ」だけでなく、文中の「ノニ」における制約を考察する際の手がかりにしたいと考えている。

### 参考文献

- Alfonso, A. (1989) *Japanese Language Patterns. Volume 1*, Sofia University.
- Makino, Seiichi and Michio Tsutsui, (1986) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. The Japan Times.
- Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell. (武内道子 山崎英一 訳. 1994. 『ひとは発話をどう理解するか — 関連性理論入門 —』 ひつじ書房).
- 家田 章子(1997) 「「ノニ」の論理構造 — 自然論理による考察 —」修士学位論文 名古屋大学.
- (2004) 「「ノニ」文における条件・結果の階層化と用法」『言葉と文化』第五号, 名古屋大学. pp.119-135
- (2005) 「共起表現から見る「ノニ」文の用法」『日本語教育』(125号) pp.38-46.
- 今井 邦彦(2001) 『語用論への招待』大修館書店. 言語学研究会・構文論グループ (1985) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(四)」『教育国語』(81)pp.19-31.
- 白川 博之 監修(2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 戸村 佳代(1988) 「日本語における二つのタイプの譲歩文 — 「ノニ」と「テモ」 —」『文



芸言語研究 言語篇』(15) pp.123-133.

前田 直子(1995)「ケレドモ・ガとノニとテモ —逆接を表す接続形式—」『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』東京:くろしお出版. pp.496-505.

———— (1996)『日本語複文の記述的研究—論理文を中心に—』 博士学位論文. 大阪大学.

松岡 弘 監修(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

松村 明(編)(1988)『日本文法辞典』 明治書院.

森田 良行(1989)『基礎日本語辞典』 角川書店.

渡部 学(1995)「ケド類とノニ —逆接の接続助詞—」『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』くろしお出版. pp.557-564.

#### ドラマ用例出典(引用順)

失踪: 「西村京太郎サスペンス・探偵左文字進(7)失踪」(2004.05.08)

麻婆豆腐: 「麻婆豆腐の女房」(2003.05.17)

プライド: 「プライド」(2004.02.02)

恋のチカラ: 「恋ノチカラ」(2004.01.09)

